

「喜びの奇跡」

ヨハネによる福音書 2:1-12

今日の聖書の箇所は、ヨハネによる福音書だけに記されている記事で、イエスさまのなさった「最初のしるし」(最初の奇跡)として、紹介されています。ガリラヤのカナという小さな村で起こった一つの出来事です。その村での結婚式に、主イエスの母マリアが招かれ、主イエスと数名の弟子たちも参列しておられました。当時の小さな田舎の結婚式は、村中で祝われ、一週間近くも祝宴が続いたそうです。

結婚式は、普段あまり変化のない田舎においては、大きな喜びの時であったのです。イエスさまが、そのような村人の喜びの宴の中に加わって、一緒になって飲み食いし、喜びを共にしたことの中に、私たちはイエスさまの自由で気さくな人柄をみる思いがいたします。イエスさまは、一般に、「悲しみ悩む者の友」として知られていますが、同時に「喜ぶ者の友」でもあられたのです。

さて、この喜びの宴のさ中に、ちょっとしたハプニングが起こったのです。それは、ぶどう酒が足りなくなったということです。主イエスの母マリアは、裏方で手伝っていたのでしょうか、いち早くそれに気づき、イエスさまに耳打ちをしたのです。「ぶどう酒がなくなりました」と。

婚宴における「ぶどう酒」は、祝い酒です。これはめでたさや喜びを象徴するもので、世話人が一番心を込めて準備するものです。その酒が途切れてしまうということは、喜びの宴を白けさせてしまう結果になります。日本式に言うところ「縁起が悪い」ということにもなり、新郎新婦の幸先に暗い影を落とすことになります。マリアは、何とかその急場をしのぎたいという思いから、イエスさまに耳打ちしたのです。

「ぶどう酒がなくなりました」。私たちの人生には、よくこういうようなことがあるのではないのでしょうか。万全の準備をしてきたのに、ちょっとしたミスで、みんなに迷惑をかけるような大変なことになってしまったとか、大きな期待と喜びが、突然、不安と悲しみが変わってしまうというようなことが、あるものです。ある人が、しみじみと語ったことがあります。「人生には、底抜けの喜びなどというものはないのですね」と、ほんとうにそうだと思います。どんなに大きな喜びの中にも、不安や恐れが付きまといまいます。結婚の喜びも、決して永遠なものではありません。当人同士は永遠の愛だ、などと思っても、数年すれば、多くの場合「倦怠期」を迎え、時には破綻をきたし、離婚騒動に発展する場合も少なくないのです。喜びの酒は、どんなに用意しても、いつかは飲み尽くし、底をついてしまうものです。

「ぶどう酒がなくなりました」。マリアが主イエスに声をかけたのは、息子としてのイエスさまを頼りとし、「どうしよう、なんとかして!」という思いだったと思います。この言葉には、自分の息子に対する母親としての信頼と、期待が込められていたと思います。

しかし、それに対するイエスさまの答えは、実につれないものでした。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだきていません」。これは、普通、子が親に対して言うような言葉ではありません。もし、ここにおられる母親である皆

さんが、自分の子供に何かを頼んで、「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです」と言われたとしたら、どれほどショックを受けることでしょうか。

しかし、イエスさまは、意地悪でこのように語ったのではありませんでした。よく動物の世界で、親が子供の自立を図るために、ある時期になると、餌を与えず、追い払うような厳しい態度をとることがあります。子どもの旅立ちの時です。イエスさまの場合、母と子の立場は逆ですが、イエスさまにとって、この時は、「神の子」としての自覚をもって新たな使命に生きる第一歩だったのではないのでしょうか。母親との人間的な絆を越えて、「神の子」として、神の栄光のために歩み出す時が来た、という自覚が、この厳しい言葉の背後に隠されていたと思われます。

「私の時はまだ来ていない」とは、やがて自分は、十字架の死と復活を通して、「神の子」としてのみ業を成し遂げなければならない。その時こそ、神の栄光を現わす時だ、という意味であろうと思います。

賢明なマリアは、そのことを冷静に受け止めたようです。その上で彼女は、召使たちに「この人が何か言いつけたら、その通りにしてください」と頼んだのです。母マリアは、自分の息子から、一見、冷たい答えを受けましたが、あの受胎告知の時のように、「お言葉どおりになりますように」と主のみ心を受け入れ、イエスを主と信じて、主は必ず最も良き道を備えたもうと確信し、召使たちに、「この人の言いつけどおりにしてください」指示したのではないのでしょうか。マリアは、ここで、親と子という人間的な関係を越えて、イエスを聖霊によって宿った「神の子」であること信じ、その為さる御業にすべてをゆだねたのです。ここにマリアの信仰を見る思いがいたします。

一方、イエスさまは、母マリアの願いに、一見冷たいような、拒否するような態度を示しましたが、召使たちに命じて、そばにあった大きな6つの水がめに、水を一杯満たすように命じて、さあ「それを汲んで、宴会の世話役のもとに持って行きなさい」と指示したのです。

イエスさまは、母マリアの要望だから、母親から言われたから、というのではなく、「神の子」としての自由な意思として、そのような指示をされたのです。神の子として、父の栄光を現わす決定的な時はまだ来ていないけれども、今、この時になすべきこと、なさなければならないことを、主体的に決断されたのです。それが、水がめに水をいっぱい満たさせて、それを祝福し祈って、ぶどう酒に変え、この喜びの宴を支え、その喜びをさらに大きな喜びで満たすことになったのです。その意味でこの奇跡は、マリアの信仰によって引き起こされた出来事であった、ということも出来るのではないかと思います。

宴会の世話役は、召使たちが汲んできたぶどう酒を受け取り、それを味見して、非常に驚いたのです。それは、これまでのぶどう酒とはまるで違う、上等なぶどう酒だったからです。事情を知らない世話役は、花婿を呼んで言ったのです。「なぜこんな上等なぶどう酒を今まで取っておかれたのですか。だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いが回ったころに劣ったものを出すものです」と。これが、イエスさまの為さった最初の奇跡、神の子としての「最初のしるし」であったのです。

水を酒に変えるという話は、ギリシャ神話の中にも、ディオニソスという神がやは

り水を酒に変えたという話がありますし、日本にも、養老の滝の水が酒に変わったという民話が伝えられています。そこには、味気のない水が、お酒であつたらどんなに幸せなことか、というお酒の好きな人の願望があるのかもしれませんが。しかし、イエスさまのこの奇跡は、そのような願望から出たものではありません。

何よりもこの奇跡は、イエスさまの愛による奇跡だということです。喜びのただ中にある新郎・新婦とその家族たちが、ぶどう酒が切れたことで、惨めな恥ずかしい思いをすることがないように、またそこに集まって共に喜び合っている貧しい村人たちの喜びの宴が中断され、白けてしまうことがないように、主イエスは、見えないところで祈られ、みんなの喜びを陰で支えられたのです。

イエスさまは、悲しんでいる人を慰めて、その悲しみを喜びに変えてくださる方ですが、喜んでいて人の喜びが消えてしまわないように、否、その喜びが一層大きな喜びになるように、祈り支えてくださる方なのです。

イエスさまは、召使たちに「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われました。この「水がめ」は、「ユダヤ人たちが清めに用いる石の水がめ」であつたと説明されています。当時のユダヤ人たちは、律法という掟に従って、「清めの儀式」を大事にしました。外から帰ってくると、汚れたものに触れたものに触れて、身が汚れているかもしれないという恐れから、手足を洗い、身を清めてから家に入り、また食事のたびに身を清める習慣があつたようです。大きな水がめは、そのためのものです。その水がめに、新しい水を一杯に入れ、それを芳醇なぶどう酒に変えたということは、主イエス・キリストによって、律法に縛られた古い旧約の時代が終わり、新しい喜びの福音がもたらされる新しい時が始まった、という意味にも解釈されます。

また、このぶどう酒は、聖餐式のぶどう酒を意味し、イエスさまの十字架の血潮を象徴するものだという解釈もあります。

いずれにしても、イエスさまは、味も香りもない、変哲のない水を、芳醇でコクのある良いぶどう酒に変えることによって、この世に新たな命と救い喜びをもたらし、神の栄光を現わされたのです。そして、弟子たちはこの主イエスの「最初のしるし」を通して、「イエスを信じた」というのです。

私たちは今、いつ止むともしれないコロナ禍の中で、不安を抱えながら、味気なく、喜びの少ない生活を送っています。十字架と復活のイエスさまは、ここにも、そして、いつも、私たちと共におられるのです。水をぶどう酒に変えてくださった主は、必ず私たちの生活の中にも、慰めと潤いを与え、喜びと命の力を与えてくださいます。日々、み言葉に親しみ、祈りつつ、主にある喜びの日々を励んでまいりたいと願います。

最後に、使徒パウロが、フィリピの信徒への手紙の中で勧めているみ言葉を紹介して終わりにいたします。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようにしなさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも思い煩うのは止めなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」(4:4-7)

アーメン